

批判的社会理論としてのA.ホネット「物象化 - 本源的承認」論の再構成を目指して

—D.W.ウィニコットおよびW.R.D.フェアベーンの原初的対象関係論に依拠して—

藤本 美貴 (立命館大学衣笠総合研究機構 客員研究員)

A.ホネットは著書『物象化』(2005)において、「本源的承認」すなわち、感情中立的な観察者の認識に個体発生上もカテゴリ上も先行する新たな承認形式と、「物象化」すなわち、その忘却(記憶喪失)の現れであり、他者や自身との実存的関わりを断ち切って物的な所与と捉えようとする誤った慣習的実践形態について論じた。一般に認められた道徳原理の侵害ではなく、その基底的条件への侵害に対する存在論的次元での批判の可能性を模索した本書は、『承認をめぐる闘争』(1992)以降の従来 of 承認論をより一層、人間学的に深めたものと評価することができる。

他方で否定的な意見も多い。とりわけそれはG.ルカーチ解釈のあり方に集中しており、ホネットによる物象化の承認論的展開は、社会経済的基盤を捨象し個々人の相互作用的局面へと問題を切り詰めるものであり、近代資本主義社会を批判する分析視点もそれを超克する契機も一切見出すことができない、というものである。確かに彼は、商品交換の拡張のみを物象化の恒常化と拡大の要因とするルカーチのテーゼを斥けながらも、自身の言う「社会的起源」について本質的な議論をするには至っていない。とはいえ『物象化』に至るまでの思索を見ると、物象化 - 本源的承認論がいかなる社会(経済)的文脈との関わりを想定したものであるかは自ずと明らかとなる。それは他でもない「ネオリベラリズム」という信念体系であり、さらにそれが、イデオロギーと化した既存の承認領域に支えられ共振していくという事態、すなわち、承認領域が次々と批判的潜勢力を失い現行の経済システムを正当化していくなかで、「第二の自然」としての生活世界による植民地化が進行するといった困難な事態である。

そこで本報告では、ホネットが単にネオリベラリズムの変革下における上記のような物象化のメカニズムを客観的に分析するに留まらず、再度、承認論の観点から間主観的に捉え返そうとした点に着目し、そこからいかなる批判的社会理論としての再構成が可能かを追究したい。その際、予てからのホネットの関心に寄せて、今一度、精神分析学の一翼を担う対象関係論を理論装置として採用する。かつてホネットは、ネオリベラリズム的状况下で要請されるポストモダンの自己の生成メカニズムとそのなかに潜在する危機=否定性の契機を、D.W.ウィニコットに依拠して見出そうとした。それは移行対象との情動的関わりに現れる乳幼児の「分離不安」と共生状態への暴力的な融合願望という契機であった。一方、(W.R.D.フェアベーンを補助線として)今次見出されるべきなのは、それよりもさらに原初的な「絶対的依存期」の段階に潜在する契機であり、より深刻な「絶滅への脅威」と、多元的自己とは似て非なる原初的防衛戦略としての「偽りの自己」の形成過程である。これら为本源的承認の欠如による必然的危機と捉えた際、その克服を目指す社会批判のあり方もまた、従来のような同一境遇の他者との自律的連帯と制度化に向けた闘争とは異なった、非対称的で(社会)臨床的な関係性に支えられた情動的連帯という形で、新たに見出される。